

移民2世 苦難の記憶

原生林開拓 6歳から農園で働いた

120年前、日本とブラジルが修好通商航海条約を結び、神戸港から多くの日本人がブラジルに渡った。神戸市須磨区の楠本昇さん(86)の両親もそうだった。貧しさから抜け出すため選んだ遠い異国での暮らしは苦難の連続だったが、黙々と働き、生活を軌道に乗せた。楠本さんは「原生林を切り開いて生きてきた日々を思えば、ブラジルも日本も大きく発展した」と振り返る。

神戸・須磨の楠本さん

1926年、三重県出身の元軍人夫婦が子どもを連れ、神戸港からブラジルに向かった。楠本さんは、夫の間末払い。衣服も生活用品も買えず、逃げ出したという。みそもし



ブラジルでの日々を振り返る楠本昇さん(右)と、娘のソニアタカコ楠本さん(神戸新聞社(撮影)・小林良多)

日本ブラジル「我々の努力が両国友好の礎」

日本ブラジル 外交樹立120年



ようゆもなく、脂っこい干し肉や干し魚は口に合わなかった。母はなじめず、「日本に帰りたい」とよく泣いていた。その後、父親は綿作りの農園で働くようになった。昇さんも6歳から農園で働き、父親

日本人のブラジル移住の歴史	
1895年	パリで日本ブラジル修好通商航海条約調印
1908年	初めての移住者781人を乗せて笠戸丸が神戸港を出港
1915年	日本移民がパラナ州北部の開拓を開始
1928年	移住者が出航前に過ごす国立移民収容所(旧神戸移住センター)が完成
1941年	戦前最後のブラジル移民船が神戸港を出港
1942年	ブラジル政府は日本との国交断絶を通告
1952年	17家族が戦後移民第一陣として神戸港からアマゾンへ出発
1971年	神戸港最後の移民船「ぶらじる丸」が出港

入植の歴史紹介 24日から企画展

企画展「日本移民の汗と涙がやると花開いた」1915年ころから肥沃な土地に恵まれていた隣のパラナ州北部を目指した。原始林と戦い、家を建て、鉄道を敷き、何もかも一からの出発。入植者同士が力を合わせて、生き抜くたくましさの様子やパネルの写真からもうかがえる。

100年たった今、パラナ州はサンパウロ州に次いで多い約15万人の日系人が暮らす。伊丹市出身なので、丹大使をさせていたでいます。清酒発祥の地、風情が感じられる地。が豊かで桜、薔薇、梅といった美しい花々に彩られ、飛行機だっていろいろな都市に飛び立つよ！



神戸新聞 夕刊 発行所 神戸新聞社 〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7 電話(078)3622局 報道部7040 文化部7044 経済部7094 販売局7066 運動部7095 営業局7081 映像部7047 地域活動局7086 パートナーセンターお客さま室 078-362-7056

うさぎ 植垣米菓 自然の味を守って... Try our taste www.uegaki-beika.co.jp

0120-16-8349 (日・祝 9:30~17:30)

晴 晴時々々 風の風日中南西の風 風の風日中北の風

気象協会関西支社

あすの天気 予想気温 24度

台25号 940 停滞 19日 9時

6時 9時 12時 15時 18時

サル、ヘビ、ビューマなどがいる原生林を切り開き、町をつくったブラジル・パラナ州 (1953年、楠本昇さん提供)

